

ノーモアヒロシマ

糸魚川中学校 2年 岡田 英里奈

今回、被爆地広島を訪れ、改めて戦争の悲惨さを学びました。

1日目の被爆体験講話でお話ししてくださったしずよさんは、お母さんのお腹の中にいたとき原爆が投下され、その後お母さんだけが亡くなられたとお聞きました。現在、被爆者の数は少なくなり、このような体験を語り継ぐことが非常に難しくなっていると聞きました。講話を通じて多くの人が事実を知る必要があると思いました。そして、私達が次世代へと語り継いでいくことが大切なのだと感じました。

2日目の平和記念式典では、世界各国の人々が参列していました。今でも世界各地で戦争が起こっているため、平和を願う外国の人が多いのだと思いました。私たちが毎年、広島と長崎で平和を祈るこの式典の意味を、今一度世界中に広めると共に、平和の大切さを改めて伝えていく使命が私たちにはあると思いました。

最終日には、平和記念資料館を訪れました。被爆で焼けただれた人の写真、実際に着ていた服、被爆後の広島市街地の写真など、どれを見ても私が今まで見てきたものの中で、一番残酷でした。今年で戦後80年となりますが、長い年月を感じさせない空間がそこにはありました。資料館を訪れている人達は皆、静かに、真剣に、展示品を見ていました。展示を見ながら泣いている高齢の方もいらっしゃいました。この残酷な被害を生み出した「リトルボーイ」と呼ばれた原子爆弾

の大きさは、長さ 3.05 メートル、直径 0.71 メートル、重さ 4,400 キログラムです。こんなもので、爆心地から直径にして約 13.2 キロメートルの範囲が被爆することに驚かされました。私は、今まで戦争の悲惨さをある程度は理解していましたが、今回広島派遣研修に参加し、その悲惨さをさらに強く感じました。

私の父方の曾祖父は、長崎で被爆しました。長崎市内のビルの4階で、仕事中に原爆が投下され爆風で吹き飛ばされたと聞きました。運良く吹き飛んだ場所が柔らかい場所だったため、命はとりとめました。その後、焼け野原にたくさんの人が亡くなっている中を、絶望しながらなんとか家に帰ったと聞きました。そして戦後、日本に危機を感じ、南米へ渡り、この被爆体験の話を何度も語ったそうです。祖母も何度もその話を聞かされ、そして私に語ってくれました。戦争や被爆の体験談は、語り継がなければいけないことだと思います。唯一日本人だけが原爆の経験をしているからこそ、語り継ぐことが大切なのです。

人が人を傷付ける戦争は、何の意味もない、何の得もないことだと思います。今、私たちは平和な世界に向け、次世代へと語り継いでいくことが平和の第一歩になるのだと感じました。
